

救いの時は始まった

イザヤ35：1～7

マルコ7：31～37

私たちは教会に来て何を求めているのでしょうか。あるいは神さまに何を求めているのでしょうか。確かに教会は神を讃美礼拝するところでありますが、人生において困難に出会ったとき、苦難、試練に出会った時など教会に来て神様に助けや救いを求めることがある経験をしたことがあるかもしれません。絶望の中で救われたという経験をしたことがあるかもしれないし、また逆に救いの確信が得られなくそれを確固たるものにしようと教会に来ておられる方もいるでしょう。ただ一時的にその苦しみや悲しみが解決されてしまうと、もう教会は結構、苦しい時の神頼みのようになってはならないのです。人間の思いや心情で吸い寄せられるように教会に来るのは最初は良いと思いますが、しかしそこから信仰生活に入り、神様の大きな愛と恵みを知ったものはそれに圧倒されて教会来ずにはおられないのです。

イエス様はユダヤ地方やまた異邦の地を巡り歩いて、み言葉と共に奇跡の業を示されて、人々が神様に目を向けて真の信仰に目覚めるように、弟子たちと共に伝道しました。今日の新約の箇所でもシリア・フェニキアから大きく回ってガリラヤ湖へとやってきました。ガリラヤ地方というのはイエス様にとっての故郷であり原風景がそこにあるのです。また最初の弟子たちにとっても同じです。弟子がイエス様と出会われたのもガリラヤ湖でしたし、またそこではいろいろな出来事がありました。懐かしい場所です。誰でも生きていて疲れた時や苦難に陥った時、悲しくなった時には昔の故郷に帰ると慰められることがあるかもしれません。イエス様が十字架で死なれて、復活されて弟子たちと再び会おうと言われたのは、そこはやはり彼らの出発点のガリラヤでした。確かに彼ら一行にとってガリラヤには良い思い出がたくさんあったのです。伝道旅行もエルサレムでは結構厳しい目に遭いましたが、ガリラヤではおおよそ良かったかもしれません。ただイエス様は、預言者は故郷では敬われない、と言われたこともありました。大体において地方では成功していったともいえるでしょう。

今私は「成功した」と安直に言いましたが、実際イエスさまの言葉を聞いて、また業を見て、或いは癒されたものがどれだけいたかは分かりませんが、その者たちがそれ以来ずっと信仰をもち続けていたかは分かりません。一時的な驚きと覚醒でもってイエス様を表面的に仰いだものが多かったかもしれませんが、その内のどれだけが真の意味でイエス・キリストがどなたであるかが分かっていたことでしょうか。それは弟子たちについても同じです。四六時中イエス様と同行しながらも、十字架に至るまでそのイエス・キリストの本質が分からなかったのです。確かに一度イエス様が弟子たちに向かって、あなた方はわたしのことを何者だと思うのかと問われたときに、ペトロは、あなたはメシア、生ける神の子ですと真実を語ったことがありましたが、それがどの深さで出てきた言葉かは疑問であります。そのようにいつもいながら悟らない弟子たちや、表面的なことしか見えていない群衆たちと共にイエス様は過ごされたのです。自分自身の真実が理解されていない寂しさというものがどれほど深かったことでしょうか。しかしそれでもイエス様は弟子たちや群衆を見捨てずに共に生きて、救いの言葉や業をお示しになられたのです。

本日のマルコの箇所では、一人の耳が聞こえず、さらに舌の回らない人が癒されるという出来事が記されています。耳が聞こえないというのは人のいうことが分からないということです。また舌が回らないというのは、自分のいいたいことが伝わらないということです。もしかするとジェスチャーのようなものは少しあったかもしれませんが、当時は文字の読み書きができる人は少なく、パピルスや羊皮紙なども貴重でしたので筆談などなかったことでしょうか。もしかしたら地面に絵などを描いていたかもしれませんが。いずれにしても人との交流、意思疎通が難しかったのです。自分

のことが分かってもらえない、また他人のことが分からないというのは、実に淋しく孤独です。人が多くいてその中に埋もれていれば寂しくはないかと言うと、そうではないのです。多くいればいるほど自分の疎外感が募り余計淋しいのです。人と意志疎通するのに非常なエネルギーと時間がかかると感じる村の人たちは、次第にその障碍を持つ人からはスタンスを置くようになってしまっていたことでしょう。

そのようなところに、イエス様というお方が来られたというので、人々はその障碍を持つ人を連れてきました。勿論その人の友人であったかもしれませんが、家族でも会ったかもしれませんが。もしかして癒されることがあればよいのだが、と思って執り成してくれたのかもしれませんが。そのように憐れむ隣人がいたことでしょう。しかしふと私は思ったのです。他にも動機がある人がいたのではなかったのか。例えばイエス様があちらこちらでものすごい奇跡の業を行うというのを聞いて、それぞれ是非自分の目で見えて確かめたいという好奇心でもってその人を連れてきた者はいなかったのだろうか。

イエス様は連れて来られたその男を癒される決断をされました。そしてその男を群衆から連れ出して、一対一になったのです。なぜイエス様はわざわざ群衆からその男を連れ出したのでしょうか。その場で、群衆の目の前で癒しの業を行ってはいけなかったのでしょうか。イエス様が癒されるのはその男のためであり、その男の生き方に対してのかかわりでありました。その癒しの業を群衆に見せるためではなかったのです。奇跡の業を何かマジックショーのように披露することはなさなかったのです。そのように配慮されたイエス様の心の内には、その男を連れてきた群衆の中には、奇跡の業を見たいという好奇心があったものがいたということを見抜いておられたからではないかと思うのです。癒しが必要なのは、救いが必要なのはその障碍を持つ男であった、野次馬ではないのです。しかし野次馬となっていた人たちにも、別の意味で癒しや救いは必要だったのです。また本当にその男を憐れんでイエス様のもとに連れてきて、手を置いてくださいと願った隣人についてもやはり救いが必要だったのです。

イエス様はその男の両耳に指を入れそれから唾をつけてその舌に触れられました。イエス様はしばしば癒しの業を行われるときに手を使われました。今日でも医療では手当という言葉をも使います。またここでイエス様はご自身の唾をもう一つの患部である舌につけられます。唾というのは血もそうですがそのものの体液です。その人の命がそこにあります。イエス様はご自身の命を差し入れたのです。そしてそのうえで「開け」と命じます。業と言葉で癒されました。私はこの日分けと命じたイエス様の言葉を少し考えてみました。開かれるのは何か、と。耳が開かれるようになり、舌のもつれがとれて言葉が開かれるようになるようにとすることだと思いました。しかしそれだけでしょいか。もしかするとこの「開け」という言葉がその男のそれからの生き方に対しても言われたのではなかったのかという思いが私の脳裏をかすめました。なぜなら、その男は耳と舌の不自由によって、今まで人生が閉じられていたからです。心を通わせることができずに心が閉ざされたままであったからです。ですからこのイエス様の「開け」というお言葉は、その男の心が開かれること、またその人生が開かれるようにとと言う意味はなかったかと思いました。

その癒された男を見て人々はすっかり驚きました。驚くということは、今までの自分の思考の枠からはみ出すという出来事です。今まで通りの自分の思考の枠の中では何も驚くことはないのですが、思いもよらないこと、自分には考えられないようなこと、今の言葉で言うならブレイクスルーが起こることなのです。それはこの驚きによって神さまに目が向く機会であるのです。本当に物事の真実に目を向けていなかった人々にも、真理なる神様に目を向ける、そのような出会いが与えられたのです。そのような救いの時が、この障碍を持ったいわば弱さを持った一人の男を通じて示されたのです。その男の弱さが神の栄光のために用いられたのです。人々の救いのために用いられたのです。イエス・キリストはわたしたち自身の弱さをも、それを用いて救いの道具としてくださいます。私たち自身が癒され、救われるとともにそれを通してこの世に救いが示されることとなるのです。